

〔三宅島特産園芸作物における生産振興技術対策〕  
パッションフルーツの産地育成に向けた生産技術の開発  
～基肥量の違いによる施肥試験～

外山早希・坂本浩介・平塚徹也・両角正博\*

(島しょセ三宅) \*現食料安全課

---

【要 約】三宅島に対応した施肥基準を作成するため、小笠原の基準量を標準とし、基肥量を変えて栽培した。基肥を半減すると8月の収穫果数が減少し、収量がやや劣る。反対に倍量施用しても、収量、果実重、糖度に差はないので、標準量の施肥が適当である。

---

【目 的】

三宅島のパッションフルーツの施肥量は、「小笠原のパッションフルーツ（平成15年3月発行）」が基準となっており、三宅島独自の施肥基準がない。施肥試験を設置し、三宅島独自の施肥基準作成のための資料とする。

【方 法】

2013年8月1日に挿し木し、8月23日に直径10.5cmポットに鉢上げ後、10月16日に事業所内パイプハウスに樹間1.5m（6.75㎡/樹）で、各区2樹ずつ定植した。品種は「台農1号」を用い、棚仕立てで栽培した。1月30日に結果枝7本に整枝した。開花数は毎日計数し、人工授粉を行った。棚下に果実受けのネットを設置し、果実がネットに落下した日を収穫日として重量・果径（長径・短径）を計測した。また収穫後5日以上経過した果実の糖度（Brix%）とpHを糖度計（型番PAL-1，ATAGO製）とpHメーター（型番B-212，HORIBA製）を用いて調査した。

試験区は基肥の量を変えて3つ設置した。標準区は堆肥20kg（N量140g）、化成8号900g（N量72g）、2倍区は堆肥40kg（N量280g）、化成8号1800g（N量144g）、半減区は堆肥10kg（N量70g）、化成8号450g（N量36g）とし、植穴0.5㎡あたりに施用した。追肥は3月から7月までの毎月1回、すべての試験区でIB化成100g/株を与えた。

【成果の概要】

1. 主茎長の推移：定植から生育後期まで、各試験区で主茎長の推移に差はなかった（図1）。
2. 開花数と収穫果数：開花数は、半減区で114個、標準区で121個、2倍区で126個と、各試験区に差はなかった。しかし半減区では、7月の開花数が他の区の半数程度にとどまり、その影響で、来島者の多い8月中旬以降の収穫果数が他の区の半数以下となった（図2，図3）。
3. 果実品質と収量：収穫果数、果実重は半減区でやや少なくなったが、長径、短径、糖度、pHは各試験区で大きな差はなかった。収量は標準区で最も多かった（表1）。
4. 果実重の推移：すべての区で収穫後半になるにつれて果実重が増加した（図4）。
5. まとめ：半減区で果実重がやや少なかったが、これは、果実重の増加する8月の収穫果数が少なかったためだと考えられる。標準区と2倍区の結果に大きな差はなく、今後も「小笠原のパッションフルーツ」を基準とした施肥を続けることが適当だと考えられ

る。

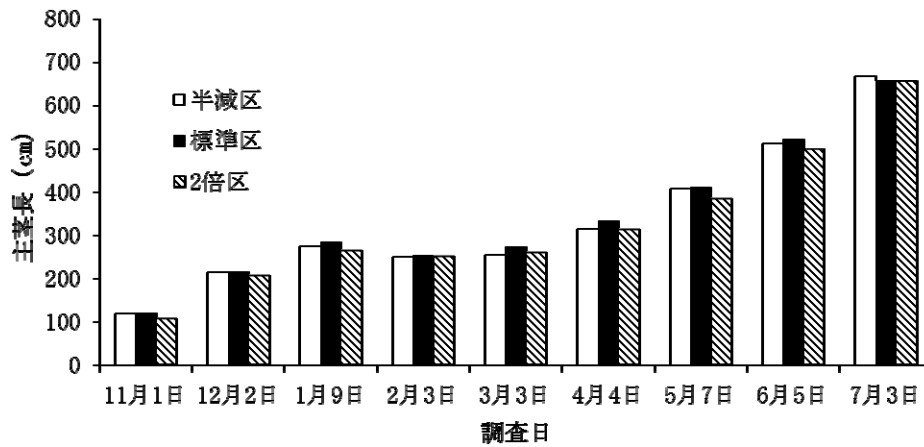


図1 主茎長の推移

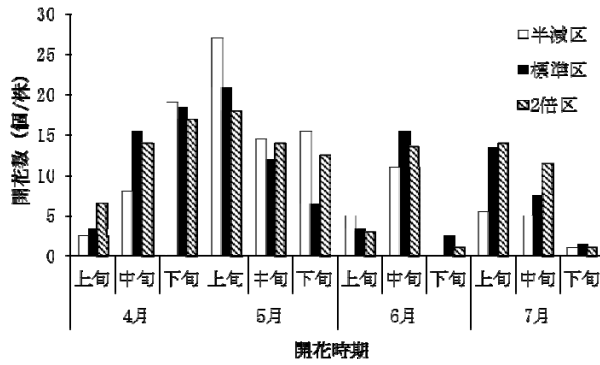


図2 開花数

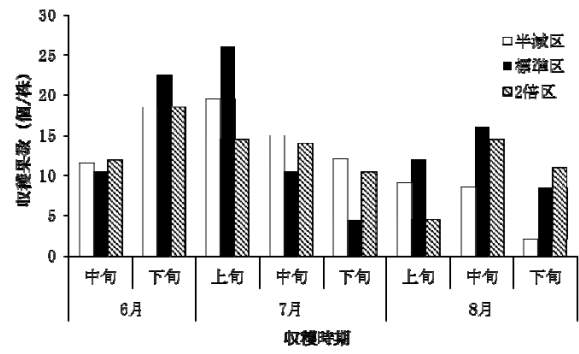


図3 収穫果数

表1 果実形質と収量

試験区	収穫果数 (個/株)	果実重 (g/個)	長径 (mm)	短径 (mm)	糖度 (Brix%)	pH	収量 kg/10a
半減区	102.0	93.5	71.5	61.7	17.4	3.0	1412.3
標準区	120.5	97.1	73.0	64.0	17.5	3.0	1733.2
2倍区	113.0	96.0	71.8	62.5	17.4	3.0	1607.2

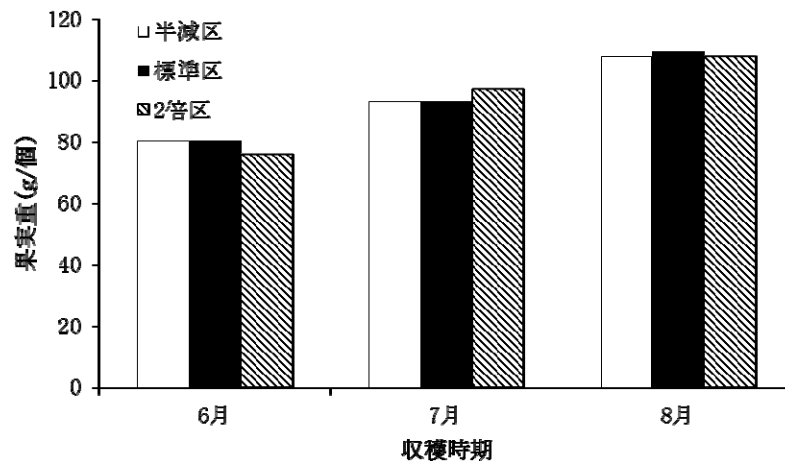


図4 果実重の推移